

授与機関名 順天堂大学

学位記番号 甲第 1457 号

在宅医療ではどのように高齢者終末期の診断をしているのか：終末期の診断の不可能性と判断のもとにケアすることの意義

(How Home Care Physicians Make Diagnosis At The Elderly End-Of-Life: Impossibility Of End-Of-Life Diagnosis And Significance Of Caregiving Under End-Of-Life Decision-Making)

山口 鶴子 (やまぐち つるこ)

博士 (医学)

#### 論文審査結果の要旨

本論文は、在宅で看取りを行っている医師へのインタビューに基づいて、在宅医療における“終末期の診断”のモデルを得ることを目的としている。インタビュー調査に協力が得られた医師は男性 12 人である。東京の他、北海道から沖縄まで地域差を考慮して調査している。インタビューデータの分析には修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (M-GTA) を用い、モデルの記述の段階でステップコーディングによる質的データ分析手法 (SCAT) を用いている。M-GTA により「終末期の診断はできないが、本人や家族、専門医、在宅医の判断の総和として、終末期の判断をしている」という「四者判断モデル」が得られた。さらに SCAT で在宅医はどのように判断するかを記述し、「在宅医は、回復の可能性はあるか、最善の医療は尽くされたかどうかを、訪問診療という長い時間軸のなかで、病歴や病状の経過から医学的判断をする。病状の説明と選択肢の提示を繰り返しながら本人の意思を確認する。全員の納得を根拠として医療倫理的判断をする。」というモデルが得られたと結論している。

本論文は、高齢者の終末期および在宅医療という極めて重要な今日的課題を扱っている。分析方法に関しては、論述化の具体的手法が示されていない M-GTA に、SCAT を組み合わせることにより分析から記述までの過程の客観性を高めている。分析方法に創意工夫がみられる。本モデルは、終末期の判断は、終末期医療の意思決定のためだけでなく、終末期の生活を支援する始点であるとするものである。直ちに一般化は困難であるものの、高齢者終末期の生活の質を高める上で意義があり、在宅だけでなく、高齢者の生活の場となっている介護入所施設においても適用できる実践的なモデルとなる。

よって、本論文は博士 (医学) の学位を授与するに値するものと判定した。